

資本と母権 I

レビヤタンとネメシス

白井隆一郎

メタモルフォーゼはどれも一部は白鳥の歌であり、また一部はまだ臆気な、光輝に満ちた色彩の中で姿かたちを取ろうとする詩の序曲です。

カール・マルクス「父への手紙」1837年11月10日¹

我がヨーロッパ文明の進歩をこれほどまで高く評価し、それに関わる民族を幸福だと讃えることのなんとおぞましいことか。すべては本質というよりは仮象、真理というよりは錯覚ではないのか。新たな一つの善の獲得を二つの古き善の喪失で購っているのではないだろうか。人間の事柄の偉大さを成しているものは同時に人間の弱さをも形成していると言ってもよいのではないだろうか。そして個々の人間においても事情はそれに負けず劣らずなのではないだろうか。われわれは自分たちの悪しき行為、悪しき特性の犠牲であるばかりか、よりしばしば良き行為、良き特性の犠牲でもあるのではないだろうか。技術的能力の巨大な進歩によって人間には究極的には全自然をも支配できる希望があるとはしばしば聞かされる話ではある。しかしわれわれは自然の支配者になる代わりに、日々ますますその奴隷になっているのではないだろうか。

ヨージン・ヤーコフ・バッハオーフェン『ギリシア旅行記』1851年²

お前はレビヤタンを鉤にかけて引き上げ
その舌を縄で捕らえて
屈服させることができるか。
お前はその鼻に綱をつけ
顎を貫いてくつわをかけることができるか。
彼がお前に繰り返す憐れみを乞い
丁重に話したりするだろうか。
彼がお前と契約を結び

1 Karl Marx, Friedrich Engels: Gesamtausgabe (MEGA). Abt. 1. Bd. 1, zweiter Halbband. Berlin (DDR) 1975. S. 213.

2 Johann Jakob Bachofen: Griechische Reise. Im Auftrag der Universitätsbibliothek Basel. Hrsg. von Georg Schmidt. Heidelberg 1927. S. 54.

永久にお前の僕になつたりするだろうか。

…[中略]…

彼の上に手をおいてみよ。

戦うなどとは二度と言わぬがよい。

ヨブ記 40, 25-32³

はじめに

ロンドンに住むマルクスが『経済学批判』を刊行し、バーゼルのパッサオーフェンが『古代人の墓象徴に関する試論』を上梓した 1859 年は日本では江戸幕府が横浜を開港した年である。「安政の開国が世界を一つにした」という言い方が日本人の自文化中心主義をほどよく揶揄する言い方ではあるにしても、五ヶ国条約によって横浜・新潟・函館・神戸・長崎の 5 港を開港した日本の開国と近代化が時を経ずして北太平洋であれ、北海道と呼ばれることになる土地であれ、樺太・サハリンであれ、極東ないしは北東アジアが忽ちのうちに西欧資本主義文明の奔流に呑み込まれる機縁になったことを思えば、「安政の開国」で世界が一つになった丁度その時、資本論と母権論というその後の資本主義社会批判の二大ディスクールが揃って誕生していたことはやはり象徴的なことであろう。

資本と母権のディスクールの完成を示す『資本論』と『オルフェウス教神学の不死説』が出版されたのが共に明治維新の前年 1867 年であった。マルクスとパッサオーフェンの積年の研究がそれぞれ『経済学批判』と『母権論』へと結晶しつつあった 1850 年代がそもそも浦賀水道であれ、相模湾小田原沖であれ、日本の開国を迫る欧米の船舶が押し寄せ、世界が地球的な規模で球体の形態を取ろうとしている時代である。この年月はヨーロッパにおいても画期的な年月である。そもそも人類の歴史において 19 世紀という世紀ほど人間社会を大きな変化を与えた世紀はない。この百年間は人類の経験したいかなる百年とも比べ物にならない。例えば、19 世紀の初頭をドイツのヴァイマルに住むゲーテの生活感情はローマのホラティウスとどれほど違っていたであろう。ナポレオンがアルプスと越えてオーストリアに攻め入った時のスイスの道路事情は、カルタゴのハンニバルの昔とどれほど違っていたであろうか。ビューヒナーの見たヘッセン州のあばら屋に住む農民たちは、例えばギリシアのアスクレピオスの見た農民とどれほど違っていたのであろう。

しかし 1850 年代を境として、すべてが変わろうとしている。ホラティウスやゲーテやプラトンやヘーゲルの理念や夢はもはやせわしなく動き廻るビジネスマンを満足させない。人々は新企画を立て、資金を集め、道路を拡張し、鉄路を敷き、トンネルを掘削する。国民国家と民主主義と起業とビジネス。石炭による熱エネルギー革命の余波を受けた鉄鋼産業はヨーロッパの隅々に行き渡り、ヨーロッパを世界を支配する技術先進国に仕立てて行く。同時にヨーロッパの縁に覆われていた大地には黒ずんだ煤煙が這い、石炭殻がうずたかく積みれ、デーメーテルの密儀の町、キュベレやバッカスの信者たちを描いた芸術品に溢れた町エレウシスにも鉄工所が立ち並び、ヨーロッパ・ブルジョワジーの世界制覇はほぼ完了し、ハンブルクとブラジルとの間に定期航路が開かれる。ヨー

3 『聖書 旧約聖書続編つき』日本聖書協会新共同訳。1992 年、(旧) 831 頁。

ロツパ列強がその内部においていかなる競争関係を持つと、各列強の艦隊は最後に残された植民地を求めてアフリカへ、北東アジアへと送られる。セポイの反乱。アヘン戦争。下関戦争。膨大な国債を発行して世界市場を支配するヨーロッパの国々はその内部においても大きく様相を変える。「十九世紀の首都」パリでのパサージュの取り壊しが 1859 年。ヨーロッパ有数の金融都市バーゼルがやはり大規模な都市改造に着手したのも 1859 年である。そしてこの年に、資本主義批判の二大源泉である資本と母権のディスクールが誕生したのである。

「ムッシュー資本とマダム大地」(MEW 25, 838)⁴の物語としての『資本論』は、早い話、悪辣な資本亭主とその暴力に曝された愛すべき大地的自然との家庭不和の物語であろうと考えてその基本的了解に誤りがあるわけではない。たとえ、グローバリゼーションの時代ともなれば、この家庭に必ずしも伝統的でナショナルな一夫一婦制の単純さは認められなくなるにしても、である。いずれにせよマルクスの積年の経済学研究にとって『経済学批判』がまさに決定的なのは、その冒頭に書き記された「一見したところでは、市民社会の富は一つの巨大な(怪物的な)商品の集まりとして現象する」(MEW 13, 15)⁵という簡潔明快な定義が商品・貨幣・資本の怪物性を明確に提起し、そしてそれは同時にマルクスの経済学批判をグリムのドイツ語辞典のような分冊形式で刊行することを不可能にすることにある。⁶ 商品から資本に至る怪物のメタモルフォーゼの描出には一つの「芸術作品」⁷として起承転結を備えた分厚い一巻の壮大な「転身譜」を必要とするからである。そのきわめて特徴的な「語り」はそれ自体として多少なりとも精密な言語態分析を必要とするであろうが、⁸ さしあたりここでは『資本論』は資本の転身譜を悪魔学として提起しており、「怪物的商品集合」から成る商品宇宙の四大的元素としての商品の分析から始まって、貨幣と資本の化生の怪物の蠢く冥界が描かれていることを強調しておくにとどめたい。「生きた労働」を食い潰す資本は「吸血鬼 Vampyr」(MEW 23, 247)のイメージで捉えられ、石炭・鉄鋼産業の大工業的技術革新を携えた資本には「キュクロプス」(MEW 23, 252, 268, 277)という神話的表象が与えられている。しかし『オデュッセイア』の「海も船も知らない」(第 9 巻)キュクロプスがそうであるように、

4 Marx Engels Werk (MEW) Berlin (DDR) 1956ff. 第 25 巻 838 頁、以下同様に記す。

5 通常、「巨大な」と訳される「ungeheuer」を筆者は「怪物的」と訳したい。「資本主義の冥界——『資本論』の言語態」東京大学出版会。『シリーズ言語態 ④ 記憶と記録』臼井隆一郎・高村忠明編。2001 年 197-216 頁を参照せよ。

6 1865 年 7 月 31 日エンゲルスへの手紙。「Whatever shortcomings they may have, (いかなる欠点を有しているにせよ)私の著作の長所は芸術的な artistisch 一個の全体であることにあり、それが達成できるのは、それが全体として私の前に出来上がって並ぶまでは絶対に印刷させないという私の方法によってのみです。これはヤコブ・グリムの方法では不可能なのです。この方法は全体として、その構成が弁証法的ではない著作にむしろ向いているのです。」(MEW 31, 132)

7 1865 年 8 月 5 日、マルクスはエンゲルスに対して、『資本論』を「芸術作品 Kunstwerk」と呼び、一部完成した原稿を順次印刷所に送ることができないのは「芸術家的な artistisch 考慮」のためであると書き送っている。(MEW 31, 134)

8 なお「机を追って門の方へ——『資本論』の言語態 II」『言語態』(東京大学・駒場)第 2 号、2001 年、159-172 頁も参照されたい。

「海も船も知らない」資本は純朴とは言いかねるにせよ、最悪、極悪非道の存在と言うにはほど遠い。資本が黙示録的な「頭から爪先まで毛穴という毛穴から血と汚物をしたたらせながら生まれてくる」(MEW 23, 788)文字通りの悪魔的相貌を有するに至るのは、海外植民地と世界市場を支配し、資本の「創世記」(MEW 23, 777)を、とはつまりまず資本の「原罪」(MEW 23, 741)を経過することによってである。

巨大産業の成果と共に海に出帆した大英帝国をレビヤタンに見立てたのは周知のように20世紀ドイツの法理論家カール・シュミットである。

レビヤタンの本質に触れた変化はまさしく産業革命の結果であった。産業革命は種々の機械の発明とともに18世紀のイギリスで始まっていた。最初のコークス溶鉱炉(1735年)、最初の鋳鋼(1740年)、蒸気機関(1768年)、紡績機関(1770年)、自動織機(1786年)など、すべてはまずイギリスで発明されたが、これらいくつかの例はイギリスの産業的な飛躍が他の諸国民をいかに大きく先行していたかをはっきり示している。19世紀になって蒸気船と鉄道がこれに続いた。イギリスはここでも依然として先頭に立っていた。偉大な海国は同時に偉大な機械国となった。…[中略]…今やレビヤタンは巨大な魚から機械へと変わったのである。⁹

カール・シュミットがホブズを頌える神話的要素を最大限に活用する叙述スタイル¹⁰はまた最高度にマルクスのものである。東インド会社のような巨大海洋組織、同じく怪獣的なジャーナリズム、「レビヤタン・タイムズ」(MEW 11, 159)を携え、「陸のレビヤタン Land-Leviathan」(MEW 25, 634)たる金融資本を従えて7つの海に出帆したイギリスは文字通り、巨大海獣レビヤタンである。世界市場革命以来、「すべての交易は世界交易である。すべての世界交易は海洋交易である」。¹¹しかし海洋とは古来、法と正義の神話的根拠としての大地の対極概念である。商品交換は売る人間と買う人間の自由平等の対等性を促進するかに見える。しかし世界市場での商品交換の十全な発達に末にあまねく自由と平等と正義の支配が達成されるであろうなどという「美しき妄想」は植民地では「まっぶたつに引き裂かれる」(MEW 23, 796-7)と、マルクスはわざわざシラーの名作『鐘の歌』の美しい文言で嘲弄している。

アメリカ大陸での金銀鉱山の発見、原住民の奴隷化と鉱山への埋葬、東インドの征服と略奪、アフリカの商業的人間狩猟場への転化、スペインからのオランダ独立、イギリス・フランス戦争、中国の阿片戦争、等々が世界市場の中での資本の創世記に関わる。これらはイギリスに典型的に見られるように、植民制度、国際制度、近代的租税制度、保護貿易制度と有機的に組み合わされる。

9 Carl Schmitt: Land und Meer. Eine weltgeschichtliche Betrachtung. [1954] 4. Aufl. Stuttgart 2001. S. 96-7. 邦訳カール・シュミット『陸と海と』生松敬三・前野光弘訳(福村書店)95-96頁。

10 Carl Schmitt: Der Leviathan in der Staatslehre des Thomas Hobbes. Sinn und Fehlschlag eines politischen Symbols. [1938] 2. Aufl. Stuttgart 1995. 邦訳カール・シュミット『リヴァイアサン。近代国家の生成と挫折』長尾龍一訳(福村書店)。

11 Carl Schmitt: Land und Meer. S. 87. 邦訳84-85頁。

これらの方法は、一部は、残虐きわまりない暴力、例えば植民制度に依拠する。しかしどの方法も、国家権力、すなわち社会の集中され組織された暴力を利用して、封建的生産様式から資本主義的生産様式への転化過程を温室的に促進して過渡期を短縮しようとする。暴力は、古い社会が新たな社会をはらんだ時にはいつでもその助産婦になる。暴力はそれ自体で一つの経済的潜在力なのである。(MEW 23, 779)

マルクスが見る世界市場は「原罪」(MEW 23, 741)の場にふさわしく、暴力の領域である。われわれがカール・シュミットを思い出すのは、マルクスとバウハーフを扱う関連においては必須のことである。と言うのも、不法と暴力の領域としての海の対極として、大地と母権を正義と法との連関で提起したのがカール・シュミットだからである。かつてのナチス・ドイツの国法学者としてカール・シュミットが「苦渋に満ちた諸経験からのすべてを曝け出した所産」¹²として提示した『大地のノモス』はバウハーフの名を挙げ、「法と正義の根拠」としての大地を議論の出発点としている。

大地は、神話的な言語において、法の母と名づけられる。このことは、法と正義についての三重の根拠を暗示している。

第一に、豊穡なる大地は、自己自身のうちに、その豊穡さのうちに、一つの内在的な尺度を隠し持っている。なぜならば、人間が豊穡なる大地へ用いている努力、労働、播種、耕作は、成長と収穫とによって、大地から正しく報われるからである。農民はすべて、かかる正義の内在的尺度を知っているのである。

第二に、人間によって開墾され耕作された土地は、一定の分配が明白になる確定せるラインを示している。この確定ラインは、畑、牧草地、森を教会づけることによって、刻み込まれる。しかも、このラインは、耕地と原野とを、輪作地と休耕地とを区別し、それにしたがって、植え込みが行われ種が播かれる。このラインの中において、耕作経営の尺度と規則が認識しうようになり、かかる尺度と規則にしたがって、大地における人間の労働が営まれるのである。

第三に、結局、大地はそのより確固とした基礎において、垣、境界線、壁、家、およびその他の建造物をになっている。ここにおいて、人間の共同生活の秩序と場所確定は明白になる。家族、ジッペ、部族、身分、所有の種類、相関関係の種類、さらにまた権力の形式や支配の形式が、ここにおいて、公然と見えるようになるのである。

このようにして、大地は、三重の様式で、法と結合されている。大地は法を、労働の報酬として、自己自身の中に隠し持っている。大地は法を、確定せる境界として、自己自身において示している。大地は法を、秩序の公的なしるしとして、自己自身の上になっている。法は大地具備的 erdhaft であり大地に関係する。詩人が完全に正義なる大地について「もっとも正義

12 Carl Schmitt: Der Nomos der Erde im Völkerrecht des Jus Publicum Europaeum. [1954] 4. Aufl. Berlin 1997. S. 5. 邦訳。カール・シュミット『大地のノモス』新田邦夫訳(福村書店)上巻 4頁。

なる大地」(justissima tellus)と述べる場合、その詩人はこのことを考えているのである。

海洋は、空間(Raum)と法との、秩序と場所確定との、このような明白なる統一をまったく知らないのである。¹³

カール・シュミットという怪しい魅惑を放散する名を時期尚早の感を恐れず挙げるにはいくつかの利点がある。一つには「法と正義の根拠」としての母権にせよ、あるいは「資本の魂 Kapitalseele」(MEW 23, 247)の「輪廻転生 Seelenwandrung」(MEW 23, 221)にせよ、それらは極めて神話的かつ政治的な言説だからである。「ナチス・ドイツの憲法学者」としてのカール・シュミットの名はわれわれに、海獣レピヤタン(大英帝国)に対する陸獣ビヒモス(ナチス・ドイツの全体主義国家)を即座に思い出させる。資本と母権のディスクールが現代政治思想史と不可分の関係に立つことになるのは当然すぎるほど当然である。第二に、ナチズムの「血と大地」のスローガンにはバッハオーフェンも利用された。しかしドイツの「悪行」はスイスの神話学者を敬遠する根拠にはならない。母権論受容史において決定的に重要な局面を示しているゲオルゲ・クライス、正確にはいわゆるミュンヘン宇宙論派の母権思想受容は単に「フェルキッシュ」や「反ユダヤ主義」のレッテルで覆い隠されてはならない問題領域が広がっている。¹⁴ カール・シュミットのノモス概念自体がミュンヘン宇宙論におけるバッハオーフェン再発見、そしてヘルダーリン復権と「ヘリングラート問題」抜きにはあり得ないであろう。¹⁵ 以上の二点はマルクスとバッハオーフェンの「資本と母権」のディスクールの性情を見渡した後に扱う予定である。小論ではまずマルクスとバッハオーフェンそのものを見たいのであるが、その際、カール・シュミットの名を挙げる第三の利点は、マルクスをロマン主義の範疇で考えることの是非に関する問題である。「政治的ロマン主義」(カール・シュミット)の概念は王政復古、封建的・カトリック中世讃美、政治的自由の抑圧などを連想させ、マルクスと結び付けるのはどうかと思われるに違いない。しかしわれわれがマルクスのロマン主義的要素を考える際にはじめから念頭に置いておきたいのは、『資本論』第一巻を出版した後になってもマルクスが抱いていた以下のような把握である。1868年3月25日、マルクスはエンゲルスに宛てて書いている。

フランス革命に対する第一の反応とそれと結びついた啓蒙活動はもちろんなんでもかんでも中世的、ロマン主義的に見ようとすることでした。そしてグリムのような人々においてさえそれを免れていないのです。第二の反応は——そしてこれはかの学者たちがそれと関係しているとは夢にも思っていないにもかかわらず、社会主義の方向に呼応しているのですが——中世を超えて民族それぞれの原初時代を見ることです。(MEW 32, 122)

13 Carl Schmitt: Der Nomos der Erde. S. 13. 邦訳 2-3 頁。

14 ジョージ・L・モッセ『フェルキッシュ革命。ドイツ民族主義から反ユダヤ主義へ』(植村秀和・大川清丈・城達也・野村耕一訳、柏書房、1998年)は広範囲に亘る縁取りにもかかわらず、「母権」に触れずに宇宙論派を論じている。

15 ラファエル・グロス『カール・シュミットとユダヤ人』山本允訳。法政大学出版局。2001年。76頁。

『資本論』第一巻以後のマルクス、とりわけ最晩年のマルクスが古代社会の研究に向かった。その成果が『家族・私有財産・国家の起源』（エンゲルス）となって結実し、しかもそこでバッハオーフェンが称讃されることになる。詳細は後に譲るが、この意味での資本と母権のディスクールの邂逅は筆者の見るところ幾多の不満の残るものである。なによりも残念なのはマルクスの死後であったということである。¹⁶「天才的神秘主義者バッハオーフェン」（エンゲルス）は以後、マルクス主義のトポスとして定着するが、バッハオーフェンの「神秘主義」はドイツ・ロマン主義の神話学を克服した結果として得られた知的成果であり、その内実を理解できる人間をマルクス主義思想陣営に探すとすれば、それはマルクスその人以外にはいないであろうからである。筆者はマルクスとバッハオーフェンに共通する資本主義批判のディスクールの大きな養分はドイツ・ロマン主義の神話学を經由して太古的な源泉から汲み取っていると考えており、「資本」と「母権」のディスクールを対比的に考察する試みは不可避免的に神話を土台とする。ドイツ語圏の生んだ屈指の神話学者バッハオーフェンを扱うにはそれも当然のこととされよう。が、マルクスに対してはどうかと問われるかもしれない。しかし筆者の考えではマルクスこそ、そのディスクールの全域を神話的言語態とも呼びたい次元で考察されねばならない言語使用者である。問題は多岐に渡る。神話学に没頭する若いマルクスに十分な光を当てることから始めたい。

1 カール・マルクス 17 歳

17 歳の青年カール・マルクスは 1835 年 10 月から 36 年 3 月までの 1 年、2 学期間、ボン大学に在籍した。ボン大学からベルリン大学に転籍する際に出された転学証明書にはこう記されている。

1835 年—36 年の冬学期

- 一、ブッゲ教授の法学総論 — きわめて勤勉かつ熱心に。
- 二、ベッキング教授の法学提要 — きわめて勤勉かつ熱心に。
- 三、ヴァルター教授のローマ法史 — 同上。
- 四、ヴェルカー教授のギリシア・ローマ神話 — すぐれて勤勉かつ熱心に。
- 五、フォン・シュレーゲル教授のホメロスの諸問題 — 勤勉かつ熱心に。
- 六、ダルトン教授の近代芸術史 — 勤勉かつ熱心に。

1836 年夏学期

- 七、ヴァルター教授のドイツ法史 — 勤勉に。
- 八、フォン・シュレーゲル教授のプロペルティウスの悲歌 — 勤勉かつ熱心に。
- 九、ブッゲ教授の国際法および

16 マルクスは晩年バッハオーフェンの議論を知った。しかしそれはモーガンの『古代社会』を介してである。モーガンの古代社会論にはしかしドイツ・ロマン主義の息吹はない。そもそもドイツ語を読めないモーガンがどのような回路でバッハオーフェンを理解したのかがすでに謎なのである。Lawrence Krader: Ethnologie und Anthropologie bei Marx. München 1973. S. 205.

十、自然法。八月五日にブッゲ教授が急死したため、証明できなかった。¹⁷

すでにトリーアのギムナジウムの時代からオウィディウスの『転身譜』やホラティウスを愛読していたマルクスがボン大学で受講する科目はほとんどすべて神話絡みである。マルクスの神話学偏重の受講選択とドイツ・ロマン主義との関係は直接「神話」の名を付された講義科目に尽きるものではない。「芸術史」がギリシア・ローマ時代の記述から始まることは改めていうまでもない。マルクスが1年を通して「勤勉かつ熱心に」聴講しているエドゥアルト・ブッゲ (Eduard Puggé 1802-1836) は、歴史法学派の泰斗サヴィニーの弟子である。それにしても錚々たる陣容である。アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルの『ホメロスを巡る諸問題』と『プロペルティウスの悲歌』、フリードリヒ・ゴットリーブ・ヴェルカーの『ギリシア・ローマ神話』。マルクスの受講科目はまさに1835年という時点でドイツ・ロマン主義の提起しうる神話学の最高の布陣と言ってよい。

ボン大学は、1810年に設立されたベルリン大学を追って1818年に設立された大学であり、もともとベルリン大学の分校の観を呈して、ドイツ・ロマン主義の色彩の極めて強い大学であるが、その象徴的存在がマルクスが1年を通じて「熱心かつ勤勉に」聴講するシュレーゲルである。A・W・シュレーゲルと言えば、弟フリードリヒと共に初期ロマン主義以来の中核的理論家であるばかりでない。スタール夫人と共にヨーロッパ中を旅行して、ドイツ・ロマン主義の動く宣伝大臣というべき存在である。『資本論』に散見する世界文学の諸カノン、シェイクスピア、ダンテ、セルバンテス等々がドイツ・ロマン主義が世界文学の範として世に広めた作家達であることを忘れるわけには行かない。とりわけギリシアの三大悲劇詩人、およびダンテとシェイクスピアをヨーロッパの遺産として発見するのに大きな影響を及ぼしたのはアウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルのウィーン講義(『劇詩文学講義』¹⁸)であった。「忘れられたもの」「誤って認識されているもの」にだけ関心があるシュレーゲルはダンテとシェイクスピア、カルデロン、ペトルルカ以外にも、古代ゲルマン歌謡、特に『ニーベルンゲン』の真価を発見したのである。フランスに長く滞在したシュレーゲルはさらにチューリッヒ湖畔のスタール夫人の居城であるコペに陣取って、スイスにもドイツ・ロマン主義の思想を根付かせている。¹⁹ スタール夫人が死去(1817年)した翌年、ドイツに戻ることを決意し、1818年5月にベルリン大学への招聘が決定した。しかし赴任の直前になってシュレーゲルは、ベルリンよりも、設立されたばかりのボン大学への赴任を希望するのである。ボンではサンスクリット研究に没頭し、名実共にサンスクリット学の創設者となる。しかしかつてのイエナやヴァイマルの交友仲間が死去した後、シュレーゲルは人付き合いからも徐々に遠退き、伝説的人間となっていた。しかし教壇には立っていたのであり、その講義を狙い定めたように「勤勉かつ熱心に」聴講しているのがボン大学生のマルクスなのである。この時期のシュレーゲルは『ラー

17 大月書店版『マルクス・エンゲルス全集』補巻1,562頁。

18 August Wilhelm Schlegel: Vorlesungen über dramatische Kunst und Literatur. I-II. Stuttgart / Berlin / Köln / Mainz. 1966-7.

19 このサークルからは言語古生物学を唱えるアドルフ・ピクテが登場する。ゲルマン原郷問題を持ち出す人物であるが、後に天才的な学童フェルディナン・ド・ソシュールの言語学上の師となる。ソシュールがまたパッサオーフェンの古代研究に大きな影響を及ぼすことになるのは後に触れる。

マヤナ』の翻訳(ラテン語への)に勤しんでいる時期である。『資本論』の叙述の端々にヒンドゥー教の神話素材が顔を覗かせていることに注意したい。

ボン大学時代のマルクスがシュレーゲルのもとで聴講しているのが『ホメロスの諸問題』の他に『プロペルティウスの悲歌』であるのは興味深い。プロペルティウスは、ウェルギリウス、ホラティウス、オウィディウスと同時代の詩人で、かつこれらの詩人と並ぶ栄誉を与えられているローマの詩人である。遠隔の地の神話素材を多く取り入れたその悲歌は難解を極め、ピンダロスと並び比される難解な構文を駆使してしばしば典型的なポエタ・ドクトゥスと呼ばれる。悲歌というジャンルの起源は死者を悼む感傷的メランコリックな「死者の饗宴」に遡ると言われる。おそらくディオニュソスの狂騒に淵源する、形式や内容を問わない「嘆きの歌」である。感傷的でメランコリックなジャンルとしての悲歌はマルクスの時代に愛好されたジャンルであった。ゲーテ、シラー、そしてなかならずヘルダーリンの諸作品を思い出させるが、『ローマ悲歌』や『マリエンバートの悲歌』を書くゲーテにエレギーについての考えを伝えているのがシュレーゲルであった。

このプロペルティウスという悲歌詩人の名がマルクスとの関係で忘れがたいのは、価値形態論の論理的操作をはじめて公式化する『経済学批判』においてマルクスはこういう言い方をしているからである。

プロペルティウス詩集 1 巻と嗅ぎたばこ 8 オンスとは、悲歌とたばこことというまったく異なった使用価値であるのかかわらず、同一の交換価値であることもありうる。(MEW 13, 16)

17 歳のマルクスにとってプロペルティウスの「使用価値」はどこにあるのか。プロペルティウスがプロペルティウスたる由縁は彼が「愛の悲歌 Liebeselegie」という特殊なエレギーの比類なき祖であったことによる。プロペルティウスの恋愛悲歌『キュンティア』がわれわれに思い出させるのは、若いマルクスの膨大な恋愛詩集である。夏休みの休暇に帰宅したマルクスは幼なじみのイエニー・フォン・ヴェストファーレン(1814-1881)に恋をした。17 歳の少年マルクスはイエニーに寄せて幾多の詩を書き、その結果、残されたのが MEGA 版全集に収録された膨大な量に登る詩集である。「夜」「想念」「詩人の愛に」「別離の夕べ」「二つの星」「感情」「夜の時間」「夢」。また『歌の本』と名付けられた詩集には「霊たち」「ハーモニー」「心の音楽」「あこがれ」「墓のロマンツェ」「船乗りの歌」「妖精の歌」「地霊の歌」「空想の像」「魔の竖琴」「憧憬」「夜の愛」「森の泉」「星たちへの歌」「海の巖」「魔の舟」「夜の想念。ディトゥランボス」「夢想。ディトゥランボス」あるいはダイレクトに「イエニーを想う」等々、題名だけからでも想像できるであろうような、おそろしくロマンチックな詩の集合である。

マルクスがそのごく若い青年時代、詩人になることを夢見ていたという事実はマルクス学においてあまり歓迎されないようである。この詩集群には否定的な評価を下すのがマルクス学のしきたりになっている。しかしわれわれがこれらの詩群に注目するのは、若い詩人マルクスと『資本論』のマルクスの間には無視できない紐帯があるからである。逆に言えば、このセヴンティーン青年詩人の心性は『資本論』を読み通した上で再度、論じられるべき問題を多々孕んでいる。ここでは前もって一つだけ、小論の枠組にとって極めて重要な特徴を示すパラードを取り上げておき

たい。『セイレーンの歌』と題された長詩である。大月書店版マルクス・エンゲルス全集から中野和朗の訳を引用させていただく。

セイレーンの歌

波はおだやかに音をたて、/ 風にたわむれて、/ 高く跳ねあがる。/ 波の底からセイレーンたちが / 姿を現わし、美しい / 列をつくって漂っている。

おごそかな天の祝祭に和して / かの女らは豎琴を弾き、/ 霊妙な調べを奏でる。/ かの女らは遠くのものすべて、/ 地球も星も / 歌にとりこむ術を知っている。

深く不思議に心をとらえ、/ 灼熱して息吹きつづける調べには、/ 非のうちどころもない。/ その暗い力の前には / 人の子は耐えることはできず、/ ついには波に吞まれてしまう。

大波の流れの中に、/ 神秘に満ちて神々しく / 王国が現われ出ると見える。/ まるで水底深く / 青い海の暗がり / 神々が眠っているかのように。

そして憧憬の化身のように、/ 明るい美の熱火に包まれて、/ セイレーンたちは浮かび上がる、/ かの女たちの眼差しは燃え、/ 琴は諧音を吐き、/ 波浪について燃え上る。

その時歌人が高く優しく、/ 周囲に狂喜してたかまる / 波にのって近づく。/ 眼差しはいかにも自由に屈託なく、/ 姿は愛と希望のように / 清浄に輝く。

豎琴の音は海底を支配し、/ 眠っていた水の精たちが、^{ナーデー} / 陶然と耳を傾ける。/ そして豎琴の音と歌とに、/ 波はこぞって共鳴し、/ 高々と躍る。

聴きたまえ！ その歌は憧憬のように、/ 遠い魔界の調べのように、/ セイレーンたちの歌のように響く / この若者を惑わそうと、/ セイレーンたちはその歌と / 美しい装いに身を飾る。

「お若い方！ 浮かんで演奏してください、/ きき惚れる海の波を鎮めてください、/ 胸は気高く高まって、/ あなたを天に運んでみましょう。」

「この満々たる水の館では / 歌声だけが響きます、/ 大波が崩れ落ちるたびに、/ 歌の響きが高まります。」

「わたしたちが歌を楽しく運んでゆくと、/ 歌は渦巻いて消え去ります、/ すると眼差しは明るく輝いて、/ 天が降りてまいります。」

「おいでなさい、わたしたち霊の仲間に加わって、/ あなたの心に魔法を学ばせなさい、/ 波の踊りに聴き入ると、/ 恋の苦悩が聞こえてきますわ。」

「世界は海から生まれたの、/ 海が霊たちを運んだの、/ 霊たちを波が揺すっていたころ / 宇宙はまったくの空でしたの。」

「お空と輝く星々が、/ 青くうねる大波と、/ やさしく踊るさざ波の、/ 姿を上から見下ろすとき、」

「滴が震えおののいて、/ 世界を誇らしく包むとき、/ 大波を満たす霊たちの、/ 生命がたち昇ってまいります。」

「霊の生命にふれて、あなたは、/ 万象を知り尽くそうと歌に燃え、/ 熱火の響きに心をうたれて、/ 天の光に燃え上がります。」

さあ、さあ、降りていらっしやい、/ ちょっと握手をいたしましょう、/ 四肢は霊と同じになって、/ 水底の国が見えますのよ。」

セイレーンたちが上ってくると、/ すべての波は沈黙し、/ かの女らを取り巻いて震える。/ そのうなじに捲毛がからみ / 快い涼気を呼ぶが、/ 水はすべて火と燃える。

まるで妄想に捉われたように、/ 若者の眼に涙が溢れ、/ 胸は切なく早鐘をうつ。/ 眼は釘づけにされて離しようもなく、/ 心はかの女らのために燃え上がり、/ もはや愛の歡喜に亡びゆくほかはない。

彼は心の平静を得ようとしてか、/ しばし沈思しているが、/ やがてすくと身を起こし、/ 神にも等しい豪放な、/ 誇らかな姿で下を見ると、/ 殷殷と耳にひびく声。

「きみたちの冷たい水底では、/ 貴いものも意を通ずることはできぬ、/ そこには燃える永遠の神がいない。/ きみたちはぼくを惑わそうと媚態を見せるが、/ ぼくを幸福にしようとはしていない、/ きみたちの歌は嘲りだ。」

「きみたちは胸の高鳴りを知らない、/ 心臓の熱いたぎり、/ 魂の高い飛翔を知らない。/ ぼくの胸の中には、/ すべての神々が住まって続べている、/ ぼくは決して騙されない。」

「きみたちにぼくは解らない、/ ぼくの愛も悲しみも、/ 灼熱の憧憬もわからない。/ それは繊細な力に支えられ、/ 滔々たる調べとなって / 稲妻のように天へと走り昇るのだ。」

その威厳におされてセイレーンたちは / どっと明るい涙を流し、 / きらめきながら沈んでゆく。 / 引かれるようにかの女らは去ってゆく、 / だが、ああ！ 高潮がかの女らを封じこめ、 / 波に包んでしまう。

(中野和朗訳)²⁰

ほとんど際物めいた神話的設定と思われるかもしれない。しかし謎がある。ここでセイレーンの側を通り過ぎるこの「若い歌人」とは誰なのか。セイレーンの歌の脇を過ぎゆく船人と言えば誰でもオデュッセウスを思い浮かべる。岩礁の危機を通過する折り、原初的美、死の誘惑を潜めたセイレーンの歌声にいかに対処するかは幾多の詩人や劇作家や批評家の論じるところである。セイレーンとオデュッセウスという主題はとりわけ 20 世紀の多くの詩人や作家の創作意欲をかき立てており、即座にリルケ『セイレーンの島』（『新詩集別巻』1907）、カフカ『セイレーンの沈黙』（1917）、あるいはブレヒト『オデュッセウスとセイレーン』（1933）を思い出すことができる。そしてまた、自分をマストに縛り付け、部下には耳に蠟を詰めさせて、芸術的享受を行う近代市民のプロトタイプとしてオデュッセウスを提示する『啓蒙の弁証法』²¹などもこの関連では思い出されよう。ところがマルクスの『セイレーンの歌』は予想外の設定を置いている。身の安全のために自分をマストに縛る市民のプロトタイプ・オデュッセウスに代えてマルクスは、歌の美しさでセイレーンを凌駕する歌人オルフェウスを登場させたのである。マルクスが無知であったのだろうか。そうではない。

『オデュッセイア』というホメロス叙事詩がその父権的表層の背後に幾多にもわたる古層を含み持っていることは、バツハオーフェン以後の母権的先史研究の成果をまたねばならない。20 世紀に入って、神話学史上類い稀な金字塔と呼ばれる発見がある。スイス・バーゼルの神話学者カール・モイリは 1921 年の論文『オデュッセイアとアルゴ船』において、『オデュッセイア』が古代の、しかし全体としては散逸した叙事詩『アルゴ船航海譚』を下敷きにしていることを証明したのである。モイリによれば、『オデュッセイア』はそれに先行する『アルゴ船航海譚』の諸モチーフを踏襲している。とりわけセイレーンの巻は帰路についたアルゴ船の物語の反復であった。アルゴ船。古来、

おお、なんとという怪物が轟々と

声も響きも凄まじく、滑ってくることだろう。（キケロ『神々の本性について』²²）

と歌われる怪物的快速船である。コルキスから帰るアルゴ船の乗組員たちはセイレーンの危険な

20 大月書店版『マルクス・エンゲルス全集』補巻 1,338 頁以下。MEGA. Abt. 1, Bd. 1, S. 586–590.

21 『啓蒙の弁証法』（アドルノ、ホルクハイマー）のオデュッセウスと母権に関しては拙論 Der Bachofen-Wiederentdecker Ludwig Klages. Mit besonderem Bezug auf das Odysseus-Kapitel der „Dialektik der Aufklärung“. 『ドイツ文学における ユートピア的なもの の位相』昭和 63 年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書。1989 年。46–71 頁を参照せよ。

22 E. R. クルチウス「アルゴナウテス達の船」『ヨーロッパ文学批評』松浦憲作・川村二郎・円子修平・高本研一訳、紀伊國屋書店。1969 年。259 頁以下参照。

歌声を克服するために身を縛ったり、耳を塞いだりはしなかった。なぜなら、彼らの中にはセイレーンの歌声を凌駕する、より美しい歌を歌うオルフェウスがいたからである。

マルクスはあたかもセイレーンの歌う歌を凌駕する歌人はオルフェウスに他ならないことを知っているかのようである。瓢箪から駒というべきなのか。そうではない。マルクスはボンで「勤勉かつ熱心に」聴講していたのはヴェルカーであった。ヴェルカーはドイツ・ロマン主義の神話学を代表するクロイツァーの囑望を受け、フンボルトとも親しい関係にあり、他方、歴史法学派の一郭から生成するゲルマン学のヤーコブ・グリムの『ドイツ神話学』と平行する形で、もっとも優れた成果を産出している神話学者であった。モイリの論証がまさに神話学の金字塔を意味していたとしても、そのモイリが多くを負っているのが、ヴェルカーなのである。この後世にも名を残す著名なホメロス学者は『オデュッセイア』がホメロスと呼ばれる詩人の単独の創作ではありえず「蒼古の人々の想像」²³ が下地として働いていると考え、『オデュッセイア』にオルフェウス教の教義を読み込む「ヴェルカー主義」とも呼ばれる解釈法を後々の時代に残す神話学者である。ヴェルカーはホメロスに先行する世界への糸口を明確に見いだしていた先駆者の一人であった。1832年、とはつまりマルクスが受講する3年前のことである、ヴェルカーは彼の名を一躍有名にする重要な論文を発表している。『ホメロスのパイアケス人と至福者の島』²⁴ においてヴェルカーはオデュッセウスを故郷に運ぶ船乗りたちは「死の渡し守たち」であるという「ロマン主義の真髓」²⁵ のような主張を行ったのである。しかし筋の通った主張である。オデュッセイアは冥界降りである。オルフェウスの冥界降りとオデュッセウスの冥界降りとは素材的に結ばれている。オデュッセウスをオルフェウス教の教義として読むことは古代アレクサンドリア以来の新プラトン主義の伝統でもあり、アレクサンドリア主義と新プラトン主義はドイツ・ロマン主義の神話学の血脈である。²⁶

カール・モイリが説くトロヤ戦役に先立つ英雄たち、イアーソン、ヘラクレス、リュンケウス、そしてオルフェウスら50人の英雄は、ゲーテの遺言的著作『ファウスト第二部』でわれわれに親しい。フンボルトの薦めに従って封印され、死後開封された『ファウスト第二部』の出版はまだ数年前の事件である。マルクスはアルゴ船についての知識は確実に有していた。太古の叙事詩『アルゴ船航海譚』の全体が失われたとしても、その難破した「海を走る怪物」の破片は後々の文学に継承されて漂流しているからである。文学的統一体としては難破した古代の怪物的快速船『アル

23 Karl Meuli: *Odyssee und Argonautika. Untersuchung zur griechischen Sagengeschichte und zum Epos.* [1921] Utrecht 1974. S. 65.

24 Friedrich Gottlieb Welcker: *Die Homerischen Phaiaken und die Inseln der Seligen.* [1832] In: *Kleine Schriften.* Bd. 2, Bonn 1855. S. 1-79.

25 Alfred Baeumler: *Bachofen der Mythologie der Romantik. Einleitung zu: Der Mythos von Orient und Occident. Eine Metaphysik der Alten Welt.* Aus den Werken von J. J. Bachofen. Hrsg. von Manfred Schroeter. [1926] 2. Aufl. München 1956. S. 235.

26 ドイツの新プラトン主義的神話学を代表するフリードリヒ・クロイツァーに関しては拙論「遭遇の言語態——ドイツ、ロマン主義の象徴・アレゴリー論」を参照されたい。『シリーズ言語態① 言語態の問い』山中桂一・石田英敬編。東京大学出版会、2001年。241-260頁。なおクロイツァーとパッサオーフェンの象徴解釈の差異については拙論 *Differenzen in der Symbol-Mythos-Korrelation bei Creuzer und Bachofen.* In: *Literarische Problematisierung der Moderne.* Hrsg. von T. Takahashi. München 1992. S. 171-184.

『ゴ—船航海譚』の破片をホメロスやピンダロスに残している。そしてその一つがオウィディウスの悲歌『悲しみの歌』である。詩人として立とうとするカール・マルクスは文学的試みとしてその『第一悲歌』を自由翻訳し、次の一節を残している。

カペレウスの海岸にうちあげられた
アルゴ—の乗組員は誰にしても、
エウボイアのおしよせる高潮へと
ふたたび船を導くことはないだろう。（橋本博訳）²⁷

マルクスのオウィディウスへの傾倒はすでに幼少年時代に始まり、特にヴェストファーレン男爵の薫陶を受けて以来のことである。オウィディウスの『メタモルフォーゼス 転身譜』がマルクスの神話学知識の常識的源泉であったことは疑いない。しかし『資本論』のマルクスを念頭に置くわれわれにとって重要なのは、『資本論』そのものが「資本の魂」の『メタモルフォーゼス 転身譜』を踏襲していることだけなのではない。入念に探られるべきは、カール・マルクスという革命の予言者の髭面の固い仮面の下に隠されたオルフェウスの詩人の顔なのである。

2 歴史法学派の周辺

18歳のマルクスは1836年10月、ボンを離れ、ベルリン大学に入学した。マルクスとベルリン大学という、即座に「ヘーゲル左派」とこだまが帰る。しかし注意したいのはむしろ、マルクスが歴史法学派の近くに勉学の出発点を取っていることである。マルクスがボン大学で学んだブグゲは歴史法学派のサヴィニーの弟子であった。残念ながらノートは残されていないが、1837年の時点で、マルクスはローマ法の哲学に関する大きな著述を試みていた。勉強していたのはサヴィニーの『占有権論』である。ベルリンのマルクスは早速、サヴィニーの授業を聴講しているのである。

その講義室にはスイス・バーゼル出身の学生ヨーハン・ヤーコブ・バッハオーフェン（21歳）が同席していた筈である。バッハオーフェンもまた、マルクスがボンで過ごしたのと同様、故郷のバーゼル大学で1834年から1年間、ギリシア・ラテン文献学、歴史学、法学を学んだ後、1835年にベルリン大学に——マルクスの1年先輩として——入学していたのである。

歴史法学派には両面の顔がある。哲学者フィヒテを学長として出発したベルリン大学を創設以来、副学長として実質的には大学設立者と言うべき存在を示してきたのは歴史法学派のフリードリヒ・サヴィニーである。ナポレオン以後の国民国家形成時期のヨーロッパ各国の大学の学問編成が法学部を中心に行っていることは当然であろう。フランス啓蒙思想の人間には天与の人権があるとする自然権思想に対抗してドイツが思想的拠り所としたのは歴史法学であり、自由と平等と博愛に対抗する有機的身分制国家の理念であった。

27 大月書店版『マルクス・エンゲルス全集』補巻1,379頁。

ローマ法は特に 19 世紀のドイツ語圏の市民法に大きな影響を与えた。自然法哲学が 17-18 世紀の間、絶対専制国家の重商主義の経済政策に大きな影響を及ぼしたのに対し、ローマ法は自然法思想に対抗して、リベラルな資本主義社会の市民法に道を開くことに貢献していた。と言うのもそこからは自由主義的経済政策にとって必要な所有の自由と契約の自由を導き出すことができるからである。ローマ法は近代的市民生活に見合う法的精密さを備え、いわば「歴史的正当性」を有していたのである。この「歴史的正当性」がそもそもフーゴーとサヴィニーの歴史法学派のプログラムに含まれており、現代国家への積極的関与の姿勢が歴史法学派を成しているのである。²⁸

しかし反面がある。歴史法学派は法が歴史的に生成したものであることを主張する。法の歴史的生成を探るという研究姿勢は一方でゲルマン法の歴史的探求を要請し、ヤーコブ・グリムのゲルマン学を誘発するばかりでなく、歴史を遡って法の起源を探るという歴史法学派の姿勢はそもそも神話研究というべき側面を併せ持ち、サヴィニーの幼少時以来の盟友でロマン主義を代表する神話学者クロイツァーの神話学とも連動している。バッハオーフェンの『母権論』が生まれ出る思想母胎である。

サヴィニーの周辺で法学を学ぶバッハオーフェンとマルクスを並べた時、この二人の共通点はむしろより明らかになる。マルクスの神話熱は一向に止まず、詩人として立つ希望は消えていない。一方、バッハオーフェンも、たとえ当面、ローマ法研究に精を出しその成果がモムゼンの絶讃を受けるにせよ、バッハオーフェンの関心の中心にあるのはそもそも最初から古典解釈学の一部としてのローマ法であり、バッハオーフェンがパンデクテンを習ったのはベルリン大学の名物教授とも言えるアウグスト・ベークの講義においてであった。

ベルリン大学は今で言う「文系の学問」を統括する学問としての解 釈 学^{ヘルメノイティク}の分野でも特記すべき大学である。いうまでもなくベルリン大学が近代解釈学の祖シュライアマッターと古典文献学のヴォルフを擁する大学であると言えるからなのであるが、ベークはヴォルフとシュライアマッターの弟子であり、やがて後のディルタイの解釈学との間を埋める人物としてベルリン大学の名物講義というべき「解釈学」を毎学期行っていた。解釈学的文献学の課題を「かつて人間の精神によって認識されたものの再認識」²⁹ という公式にまとめたことで知られる文献学者である。生涯の講義「解釈学」は死後、弟子によって出版されるのであるが、生前のベークの主要業績はピンダロスの校訂・注釈であった。ドイツ・ロマン主義においてピンダロス受容は大きな広がりを持っていたが、バッハオーフェン(そしてマルクス)においてもその影響が窺われる。バッハオーフェンの古代研究の中心はオルフェウス教を巡ることになり、バッハオーフェンのいわゆる「墓解釈学」³⁰ は『古代人の墓象徴に関する試論』『母権論』『オルフェウス教神学の不死説』『ローマのランプ』と生

28 Uwe Wesel: Bachofen und das römische Recht. In: Johann Jakob Bachofen (1815-1887). Eine Begleitungspublication zur Ausstellung im Historischen Museum Basel. 1987, S. 76.

29 August Boeckh: Encyclopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften. Hrsg. von Ernst Brautscheck, Leipzig 1877, S. 10.

30 拙論 Bild und Sprache in der Sepulkralhermeneutik Bachofens. In: Beiträge zur Germanistik. The Proceedings of the Department of Foreign Languages and Literatures. Bd. 36. University of Tokyo. 1988. S. 65-108.

涯に亘ってオルフェウス教の啓示を問題にし続けることになるが、オルフェウス教の神学的教義のもつ「死後の死者の裁き」と「輪廻転生」の成立を証拠付ける詩文を残す最古の詩人がピンダロスであった。オリュンピアの祝勝歌においてピンダロスは勝利者の故郷と家族を讃えるのであるが、勝利者の先祖を讃えるに際して母系の故国を辿るピンダロスはバッハオーフェンにとって母権的国家の徳性を歌う詩人としてヘシオドスに並ぶ重要性を持つことになる。³¹

われわれが注意したいのはマルクスとの関係である。と言うのは、『資本論』のマルクスは吸血装置的な大工業の狂騒的「旋回舞踏 Wirbeltanz」を「酒神礼讃 Dithyrambus」と呼び、大工業を頌えるユーアを「ピンダロス」(MEW 23, 441) などと呼ぶ。単なる文学的粉飾ではない。マルクスは「資本の魂 Kapitalseele」の「輪廻転生 Seelenwandrung」を描き出すに当たってオルフェウス教の用語を執拗に踏襲して「資本の転身譜」を描き上げることになるのである。

資本のディスクールと母権のディスクールがいかに異質に思われるにしても、その内実に詳しく接すると極めて親近性を帯びた素材が充満している。それを供給しているのはドイツ・ロマン主義的神話学、歴史法学派などの思考財、具体的にはベルリン大学の知的環境である。マルクスとバッハオーフェンの二人が聴講する科目には大きな共通性がある。神話と法の起源を問題にしたい二人ならば当然であるかもしれない。わずか256人の学生数で始まったベルリン大学である。この間、規模は大きくなっていったにせよ、1年間を同じ学部所属したマルクスとバッハオーフェンが同じ講義を聴講するするのも当然であろう。例えばリッターの「地理学」である。これは「地理学」と言いながらも、例えばストラボンの地理学や、パウサニアスの『ギリシア案内記』がそうであるように、世界各地の地理と風土を神話的過去から解き明かす学問だからである。バッハオーフェンもまたリッターの知見を『母権論』に多く活用している。しかし特に注目したいのはマルクスもバッハオーフェンも、サヴィニーの弟子ルドルフ(Adolf Friedrich Rudorff 1803-1873)の「相続法」を聴講していることである。バッハオーフェンはルドルフの講義からの膨大なメモを残している。1841年、パーゼルで学位を取得したバッハオーフェンはサヴィニーとルドルフに学位論文を献呈しているが、ルドルフに対してはかなり親身の援助を貰った旨が記されている。

一方、興味深いことに、ベルリンではるかに授業にも出ない詩人志望のマルクスもルドルフの講義だけは熱心に聴いている。『資本論』の序文には「死者が生者を捉える! Le mort saisit le vif!」(MEW 23, 15)という印象的な法諺が『資本論』の冥界を特色付ける文言として用いられている。「死者は直ちに生者に遺産の占有権を譲る」という意味での、相続法の法諺である。過去の「死んだ労働」が資本として生者に取りつく冥界としての資本主義の生成を描き出す雄大な怪奇譚の序文

31 20世紀初頭、ヘリングラートによるヘルダーリンのピンダロス翻訳の再評価がヘルダーリンの復活を告げる事件であるが、まさにそのヘリングラートを一員として布陣するミュンヘン宇宙論派が同時にバッハオーフェンの発見を果たすことになる。以下の拙論を参照せよ。「母権的ハーケンクロイツ。アルフレート・シュラーとその影響」『東京大学教養学部外国語科研究紀要』。第32巻。1984年。39-94頁。Urpolarität und Urerinnerung. Daniel Paul Schrebers Denkwürdigkeiten am Instrumentarium Ludwig Klages'. In: Perspektiven der Lebensphilosophie. Hrsg. von Michael Großheim. Bonn 1999. S. 77-95. Draußen vor den Porten des allegorischen Zeitalters. Die mediale Symbolik Alfred Schulers. In: Language Information Text. Bd. 7. Universität Tokyo. 1999. S. 1-15.

にふさわしい文言なのである。

3 ベルリン大学の新フマニスムス

ベルリン大学と言えば、初期ロマン主義の拠点イエナ大学の理念を、反ナポレオン戦争の最中、プロイセンの首都におよそ軍国プロイセンとは相容れそうもない教養古典主義を中心理念として大学創設という制度化した新フマニスムスの牙城である。1806年、イエナの戦いに破れて神聖ローマ・ドイツ帝国は解体した。とは、ようやく中世が終わったばかりの国である。逆に言えばプロイセンという国家はアンシャン・レジームのない新しい国家でもある。フィヒテ、シュライアーマツハー、古典学のヴォルフなどがいわばドイツ国民に向かって講義を始めたのが1807年。フィヒテ、シェリング、シュレーゲル兄弟、クライスト等々、フランス革命とイエナの初期ロマン主義と民族戦争の時代にドイツの排出した数多くの知識人や芸術家の中であってひとり理想を現実に導く学者と官僚の力量を兼ね備えていたのはヴィルヘルム・フンボルトであった。³² 1789年、22歳のフンボルトはドイツ知識人の多くのように単にフランス大革命に感激したというだけではなく、実際に国民議会の開催されるパリを訪問していた。革新的政治家としてのフンボルトの理想はウィーン会議で破れはしたものの、1809年から1810年にかけてフンボルトが全力を傾けたプロイセンの学制改革とベルリン大学創設はその後のドイツは言うに及ばず、近代のアメリカやさらには日本の大学制度に大きな影響を及ぼすことになる。

ベルリン大学の新フマニスムスと言えば、その校門近くに掲げられた建学以来の標語「文学による総合のために UNIVERSITATI LITTERARIAE」である。

この学の王宮が属するのは

学問の英知と

知の自由の

全体性、万有性、統一性

一般性。

諸君「文学による総合 UNIVERSITATI LITTERARIAE」という

黄金の章句をこのように解したい。

ブレンターノ『1810年10月15日に寄せるカンタータ』³³

「文学による総合」。マルクスやバツハオーフェンを考える時、この「文学による総合」の理想は忘れるわけにはいかない。そして共に1830年代の後半にベルリン大学に在籍したということがこ

32 Kurt Mueller-Vollmer: Humboldts Bildungspolitik und die Französische Revolution. Übersetzt von Friedrich A. Kittler. In: Diskursanalysen 2. Institution Universität. Herausgegeben von F. A. Kittler, M. Schneider und S. Weber. Opladen 1990. S. 63–81.

33 Clemens Brentano: Kantate auf den 15ten Oktober 1810. In: Werke. Bd. 1. Hrsg. von Wolfgang Frühwald, Bernhard Gajek und Friedheim Kemp. München 1968. S. 229.

の二人のディスクリール創設者にとってある決定的な因子を与えていると見えるのである。バツハオーフェンがベルリン大学に入学した1835年の4月、フンボルトが死去した。ベルリン大学は7月のライプニッツ協会(1700年ライプニッツによって設立)の例会をフンボルトの追悼行事に当てた。追悼式典で「いまだかつて何人も達成したことがないほど多くの言語に通暁していた」フンボルトに大学を代表して追悼の辞を述べるのはアウグスト・ベークである。翌年、マルクスが入学したのはフンボルトが晩年精魂を傾けたあの言語哲学の大著『ジャワにおけるカヴィ語について』の『序論』³⁴が出版された年に当たる。フンボルトの死は筆者には象徴的に思える。新フマニズムスのベルリン大学はすでに過去のものになろうとしているのである。

ベルリン大学創設に際して大学独自の経営基盤を確保するなど、今流に言えば独立法人化に尽力したフンボルトは大学に学問の自由、自治、研究教育の自由を確保している。しかしその革新的フンボルトはカールスパートの決議によって政治世界から追放されていた。むろん、そのことによって稀有な言語学者としてのフンボルトの著作を残す機会に恵まれたと言えるのであるが、大学そのものはギリシア的文化・教養理念に裏打ちされた「文学による総合」を目指す大学というよりは、新興プロイセンの国家運営を円滑にするための官僚を養成するための「パンの学問」の場になろうとしているのである。ベルリン大学が新フマニズムスの大学であることをやめるのは1840年であると言われる。³⁵ベルリン大学が次第にプロイセンの国家色に染め上げられていく。³⁶その象徴的な人事がヘーゲル亡き後のシェリング招聘とアイヒホルンの文部大臣就任である。ベルリン大学はサヴィニーの歴史法学と一方ではヘーゲルの歴史哲学とによって、近代の大学がその中心に歴史学を有する構造を定着させた大学である。³⁷しかしその「歴史」もすでに1825年に着任していたレオポルト・ランゲが1841年以降、同時にプロイセン国家の公式歴史記載者となることで変化を兆したと言わなければならない。ギリシアとローマを世界史の起源として、しかしニーブーアの古代史に匹敵する近代史構築への渴望から、ギリシア・ローマを模範としつつ、プロイセン・ドイツの歴史を重ね合わせる「世界史」は国家からの大学の独立を標榜したフンボルトの理想とはいささか遠いものである。フンボルトは最晩年、カヴィ語の叙事詩『プラタ・ユッダ』に打ち込み、弟のアレクサンダー・フォン・フンボルトは死後出版された『カヴィ語序説』の謝辞において、兄の研究を文通で支えたアウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルを真っ先に挙げている。ドイツ古典主義はギリシア的であり、ドイツ・ロマン主義はインド的であると言う。アウグスト・ヴィルヘルム・シュ

34 ヴィルヘルム・フォン・フンボルト『言語と精神。カヴィ語研究序説』亀山健吉訳。法政大学出版局。1984年。

35 Studium Berolinense. Aufsätze und Beiträge zu Problemen der Wissenschaft und zur Geschichte der Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin. Hrsg. von Hans Leussink, Eduard Neumann und Georg Kotowski. Berlin 1960.

36 1840年、キリスト教批判をもってヘーゲル派を忌避していた皇帝フリードリヒ・ウィルヘルム4世が即位し、文部大臣にアイヒホルンを据えることによって、ヘーゲル派の大学からの追放が始まった。H. v. Treitschke: Deutsche Geschichte im neunzehnten Jahrhundert. Leipzig 1879-1894. Bd. 4, S. 57f.

37 Timothy Bahti: Allegories of History. Baltimore/London 1992. S. 3ff.

レーゲルは晩年『マハーバーラタ』の翻訳に打ち込んでいたが、その余波を少なからず受けながら大著『ジャワにおけるカーヴィ語』を遺作として残すフンボルトや、この時期ハワイにあってポリネシア語を学び始めているシャミッソーを思えば、ドイツの生み出した知性は、東南アジア、マレー半島、インドネシアを支配するオランダやイギリスのレビヤタンに負けじと、こぞって海洋東南アジアに向かっているとさえ言える。ちなみに、フンボルトのジャワに関する具体的な知識はイギリス人の前ジャワ副総督トマス・スタンフォード・ラッフズ³⁸に依拠している。同じラッフズ³⁸の『ジャワ史』に依拠して「17世紀の典型的資本主義国オランダ」の「原罪」(MEW 23, 780)を描くマルクスをフンボルトの脇に置けば、二人の間に広がるヨーロッパ精神史の趨勢はかなり明白なものとなる。

しかし1840年の時点に戻ろう。われわれが強調したいのは、マルクスとバッハオーフェンが学んだベルリン大学がこの意味では新フマニスムスの伝統を保ち、あるいは保つために苦闘する最後の世代に属することである。「文学による総合」を目差す学問、それがドイツ語の、その独特な強度において他の言語に翻訳できない *Wissenschaft* である。

学問の入り口には、地獄の入り口と同じように次の要求が掲げられなければならない。

ここに一切の疑いを捨てねばならない

一切の怯懦はここで死ぬがよい。

マルクス『経済学批判』序言 (MEW 13, 11)

「学問 *Wissenschaft*」にかける——グノーシス的とすら言いたくなる——鞏固な信念、これはバッハオーフェンにしても同様である。詳しくは別稿に譲るが、バッハオーフェンがベルリンを去り、新フマニスムス文献学の拠点ゲッティンゲン大学に学籍を移したのは、時あたかも「ゲッティンゲン7教授事件」に揺れ動く時期であった。バーゼル屈指の名家の子息として、バッハオーフェンは難なくバーゼルのローマ法教授の職を得る。順調に見えた学問的キャリアはしかしすぐに頓挫する。「最も新フマニスム的な神話学者」³⁹ バッハオーフェンは結局、大学に生きることにはさしたる意味を見いだせないからである。バッハオーフェンもマルクスも1840年以後のドイツの学問的世界に対して強烈な——論敵からはパラノイアと呼ばれる——「知的環境不適應」がある。

4 オルフェウス

バッハオーフェンとマルクスはその思想的母胎を同じくしているだけではなく、その思想的行路は、互いに意識することなしに、ある重要な交錯さえ示している。ローマ法学徒として出発し、バーゼル大学のローマ法の教授となったバッハオーフェンはやがて職をなげうって古代研究に専念

38 ラッフズについては白石隆『海の帝国』(中公新書 2000年)に詳しい。

39 Lionel Grossman: Orpheus Philologus. Bachofen versus Mommsen on the Study of Antiquity. Philadelphia 1983. S. 80.

することになる。その契機となったのはバッハオーフェン伝記の中で「墓体験」と通称されるエトルリア(トスカナ)の墓廟体験(1841-2)であった。詳細は別稿に委ねるとして、ここでは通常、バッハオーフェンの伝記においてもあまり重視されないある事実に留意したい。バッハオーフェンはこのイタリア旅行の際、ローマで一人のドイツ人神話学者と知り合う。フリードリヒ・ゴットリーブ・ヴェルカー、かつてマルクスが「すぐれて勤勉かつ熱心に」講義を聞いたボン大学の古典学者である。ヴェルカーはローマ考古学協会の会員としてローマに滞在することが多かったのである。以来、バッハオーフェンはこの学者への崇敬の念を隠さない。バッハオーフェンにはこの時期以来、ローマ考古学協会に入会する希望が芽生えた。事実、バッハオーフェンは17年後、『母権論』の完成を待ってこの希望を実現するのである。ちなみに『母権論』はすでに1857年には完成していた。しかしすでに「学部学問 Fakultäts-Wissenschaft」(GW X 169)⁴⁰の蔓延する学問風土の中で、『母権論』のような「学部学問」に収まらない著作は出版を引き受ける出版社が見つからないのである。『母権論』は出版までなお数年を要し、出版年代としては『古代人の墓象徴に関する試論』に先を越される結果となる。しかしいずれにせよ、『母権論』を完成させたバッハオーフェンは『母権論』を「業績」としてローマの考古学協会に入会の希望し、ヴェルカーの署名とともに正式会員証が送られてくるのが1859年のことである。⁴¹この年に出版された『古代人の墓象徴に関する試論』の著者名には「ローマ考古学会員」の肩書きが添えられている。ところでなぜバッハオーフェンは『母権論』の完成を待つ必要があったのか。「母権 Mutterrecht」という言葉をはじめて使ったのがこのヴェルカーに他ならなかったからである。⁴²用語に特許権があるならば、それはヴェルカーに所属することになる。無論、バッハオーフェンがヴェルカーに敬意を払うのは語の使用権を巡ったことではない。バッハオーフェンとマルクスの学んだベルリン大学の学風は「人間精神の認識したものすべての再認識」を掲げた解釈学。宗教、政治、経済、歴史、文学、文法、解釈法、批判法、つまりは文字に書かれた一切を学的対象とする「文学による総合」を目差した学風である。しかし時代は変わった。バッハオーフェンが侮蔑の念を籠めて言う「学部学問」の蔓延である。古代の生活は本質的に宗教に関係しているものでありながら、生活現象と宗教に帰着させて論じるやり方はヴェルカーやベークを最後に、現今ではすっかり廃れてしまったのである。(GW X 194.)

ところでヴェルカーを回転軸にしたマルクスとバッハオーフェンの交錯はわれわれにある重要な観点を与える。ヴェルカーを「すぐれて勤勉かつ熱心に」聴講したマルクスはそのギリシア的世界を『セイレーンの歌』に残した。しかしそのバラードをやはりヴェルカーから影響を受けたバッハオーフェンの世界から眺めるとある重要な問題点が浮き彫りになる。マルクスの「歌人」はそもそもいかなる理由があってセイレーンの歌の誘惑を退けなければならないのか、である。

「世界は海から生まれたの、/海が霊たちを運んだの、/霊たちを波が揺すっていたころ /宇宙は

40 Johann Jakob Bachofens Gesammelte Werke. Hrsg. von Karl Meuli. Basel 1943ff. 以下においてGWと略記し、巻数をローマ数字で表し、頁を添える。Bd. Xは書簡集。

41 Bachofen GW X169.

42 Friedrich Gottlieb Welcker: Griechische Götterlehre. Göttingen 1857-1863. 3 Bde. Bd. 2, S. 495.

まったくの空でしたの。」

マルクス『セイレーンの歌』

この限りにおいてセイレーンは万物の原郷としての海の体現である。

万物は水より生まれきたり、

万物は水により養われる、

わた み 海つ靈よ、われらのために汝の永遠なる支配を続けよ！

(ゲーテ『ファウスト第二部』8435-8437行)

しかし、ならばそれだけ一層、端的に問われなければならないのは、何故、万物を運んだセイレーンはここで退けられなければならないのか、である。マルクスの「歌人」はオルフェウスでなければならないにもかかわらず、依然として男権的父権的オデュッセウスのである。バッハオーフェンならば、それはイオニア植民地のホメロスの父権主義の編み出した歴史的虚構に過ぎないのであって、「ホメロスによって引き起こされたセイレーンに対する畏れには根拠がない」（『オルフェウス教神学の不死説』GW VII 74）と容赦なく結論を出すのである。海や水を深層心理と見なすのは精神分析の定石であろうが、若きマルクスの詩集はその大半を夜の海に舞台を取りながら、なおかつその詩的自我は無意識のモメントと解け合おうとはしない。むしろ超越的・神的自我はいかなる自然的大地的海洋的誘惑の前にも断固護られなければならない。バッハオーフェン以降の精神病理分析はこの種の心的現象を「母親殺し」と呼ぶが、この傾向がマルクスには紛いようもなく顕著だからである。⁴³ これはマルクスの性格診断の問題ではない。マルクスが「母親殺し」の心性を備えたまま、築き上げた理論構成が唯・物・論オレスティアと呼ばれることが問題なのである。マテリアリスムオレスティアはマーテルとマテリアに依拠することによって堅固に成り立つ議論であるように思える。しかし『資本論』の価値形態論は、そしてそれが資本の論理であれば当然のことながら、母としてのマテリアを捨象することで成立する議論である。筆者はそれが『資本論』の論理の重大な欠損であると理解している。と言うのは、資本が人間における「自然の贈与としての生きた労働」⁴⁴ と自然そのものとしての大地を食い潰すことを如実に示す『資本論』が、その一方で自然を捨象する資本の論理と、やはり問題含みの技術論以外の唯・物・論マテリアリスムスを明示しないからである。そうであるだけになおさら、次のことが強調されなければならない。マルクスが「メタモルフォーゼ」という語を万遍なく使用して商品から貨幣へのメタモルフォーゼ、貨幣から資本へのメタモルフォーゼを描き続け、その下地にオウィディウスの『転身譜』を置いているのが明らかである以上、オウィディウスの『転身譜』が人間の樹木や動物といった資料的形象へのメタモルフォーゼを問題にしていることは、『資本論』の読者に当然の如く要求される前提的知識である。『資本論』の転身譜は、質料へのメタ

43 Arnold Künzli: Karl Marx. Eine Psychographie. Wien / Frankfurt am Main / Zürich 1966, S. 151ff.

44 小森謙一郎「喪の作業としての労働一般」『言語態』（東京大学・駒場）第2号、2001年、144-158頁、ここでは特に148頁。

モルフォーゼに代えて、貨幣と資本という抽象的形相へのメタモルフォーゼを貫徹する資本主義社会という、逆転・転倒した「逆立ちした世界」を首尾一貫して提示しているのである。全編に張り巡らされた古典的文学モチーフに対する知識は『資本論』の解読に不可欠である。

マルクスとバッハオーフェンを並べて論じる上でもっとも明瞭な神話的徴表はオルフェウスである。『母権論』や『古代人の墓象徴に関する試論』の方法をバッハオーフェンは「墓碑解釈学」と命名するが、太古的な死と墓の思想に沈潜するバッハオーフェンの理論的表明を行う主要著作が『オルフェウス教神学の不死説』（1867年）であるように、オルフェウス教的な死後の魂の探求は最後の遺作『ローマのランプ』まで続くバッハオーフェン生涯の研究課題であった。一方、マルクスにおいてもオルフェウス・モチーフが重要であると主張するのは奇異に思われるかもしれない。しかし『資本論』は明白に冥界降りのモチーフを踏襲している。「資本の魂」の「輪廻転生」は昏い冥界の薄暗がりて繰り広げられる商品と貨幣と資本といった化生の怪物の転身物語を完遂するだろう。『資本論』にはオルフェウス神話が活用されている。オルフェウス神話と言えばオルフェウスが最後に八つ裂きにされて四散する死である。マルクスの描き出す資本主義という冥界は、神話的伝承に沿って、生きた全人的労働の代わりに部分労働だけを提供する近代産業によって「詩人(オルフェウス)の八つ裂きにされた四肢 *dissecta membra poetae*」(ホラティウス *Satyrae I, iv, 42*; MEW 23, 385) だけが散乱する都市光景として完成する。

若いマルクスは詩人として立とうと考え、そのつてをドイツ・ロマン主義の系列に求めていた。マルクスはアルニムとブレンターノの『少年の不思議な角笛』（1810年）を真似るかのような民謡収集を行っているが、そんなマルクスが詩人としての登場をアルニムに期待した気配がある。マルクスはアルニムの妻、ベッティーナと会ってさえいる。1839年、ベッティーナはマルクス夫妻をトリリアに訪れている。さらにマルクスが接近しているのはシャミッソーである。シャミッソーを介して詩人として世に出る目論見も成功しなかった。しかしシャミッソーの『影のない男』はマルクスを論じる上で重要な位置を占めている。マルクスは『経済学批判』で『影のない男』を貨幣との関連で取り上げている（MEW 13, 95）。経済学を論じる上で、文学作品を引き合いに出し、メタ文学的でもあればメタ経済学的でもある叙述空間を確保するというマルクスの語りの手法の最初の現れとして注目される場所である。⁴⁵

少年マルクスは詩人になるという夢を果たすことはなかった。しかしそれはしばしば言われるように、マルクスが自分の詩才に愛想を尽かしたからというわけではない。少年マルクスの言葉への愛はある異質な神話的世界に向かっている。

Acheronta movebo. (『アエネーイス』VII, 312)⁴⁶

(われ冥界をも動かさん。)

45 Siegbert S. Praver: Karl Marx and World Literature. Oxford 1976. S. 303.

46 マルクスはこの詩句を文学習作『スコルピオンとフェーリクス』で引用している。MEGA Abt. I, Bd. 1, S. 694.

マルクスは詩人にはならなかった。しかし政治・経済学的冥界で「資本の魂」の「輪廻転生」を語り抜くオルフェウスの神話の語り部にはなるのである。

一つ留意しておきたいのは、オルフェウス教というヨーロッパ最古の宗教が頻繁に問題になるからと言って、ここである種のヨーロッパ中心主義を予測してはならないことである。古代ギリシアの生活においてオルフェウス教が大きな役割を果たしたことは疑いない。⁴⁷ しかしまさにそうであるが故にバッハオーフェンは、このオルフェウス教のオリエン特的由来を強調するのである。オルフェウス教の自然原理は母権原理として完全にオリエン特的の世界観に帰着する、とバッハオーフェンは考える。オルフェウス教はオリエン特とオクシデントを結び合わせる最も重要な紐帯なのである。(GW VII 37.)

しかしわれわれはまた同時にその反面を見なければならない。オルフェウス教のオリエン特的由来はまた同時に、それがヘレニズム世界に対するまったく異質な世界観として、憎まれ、敵視される理由ともなるのである。オルフェウス教は東洋と西洋の媒介要素であると同時に、西洋にとっての異端思想の根源でもある。オルフェウス教団やピュタゴラス教団の魂の輪廻転生や宇宙論や数象徴を豊潤に含んだ異端思想がグノーシス派の異端カルボクラテース派⁴⁸やエピクロス派⁴⁹を介して、近代ヨーロッパにまで延長線を伸ばしているのは、例えばシャルル・フーリエ⁵⁰を思うだけでも理解されることであろう。

5 ネメシス

『資本論』のマルクスは、ヨーロッパのキュクロブスの巨大産業たる石炭・鉄鋼産業が巨額の国債を背景にレールの敷設を求めて海外に、まさにレビヤタンとして海洋に進出する時代を資本主義の冥界として描き出している。しかし一方、パーゼルのバッハオーフェンも同じものを見ていた。⁵¹ レールとトンネルがこの時代の証である。石炭産業と鉄鋼産業に支えられた鉄道産業の新し

47 古代ギリシアの日常生活におけるオルフェウス教の意義については安藤 弘^{ひろむ}『古代ギリシアの市民戦士』三省堂 1983 年を参照せよ。

48 カルボクラテース(78-138 年)にちなむアレクサンドリアのグノーシス派異端集団。カルボクラテースは旧約の神とモーセの掟を拒んだ。盗むな姦淫するなという掟を笑うべきものとして非難した。人間の原初的な自然状態においては所有も一夫一婦制も存在しないからであるという。ひとが罪を犯すことによって神の恩寵の神々しい光は一層有効になるというのは、神をとりわけ喜ばず事実であると主張する。Benjamin Walker: Gnosis. Vom Wissen göttlicher Geheimnisse. Aus dem Englischen von Clemens Wilhelm. München 1992. S. 187-189. 『母権論』はその最近近くでこの異端集団に特別な注目を与えている。「すべての財と女の共有は神聖な正義の泉であり、平和の完成である。」(GW III 915)

49 カルボクラテース派はエピクロス派を尊重していた。マルクスが何故、エピクロスを学位論文の対象に選んだかについては Günther Hillmann: Marx und Hegel. Von der Spekulation zur Dialektik. Frankfurt am Main 1966 が詳しい。

50 シャルル・フーリエ『四運動の理論上下』巖谷國士訳。現代思潮社。1970 年。(この書物を快くお貸しいただいた藤井貞和教授に感謝する。)

51 拙論「バッハオーフェンとパーゼル」参照。『都市と思想家 II』石塚正英・柴田隆行・的場昭弘・村上俊介編。法政大学出版局。1996 年。186-203 頁。

い波はその軌道をスイス・アルプスまで伸ばしてくる。つい先頃までハンニバルの昔と大きく異ならなかった道路事情はスイスの観光資源を求めて大きく変わる。人々は故郷の山河に観光ホテルと結核治療所を建てることに喜々とし、道路を通し、鉄道を敷く。とりわけ人々を興奮させるのはトンネルの掘削である。

ゴットハルト・トンネルさえ残ればあとはどうでも良い。それが、より高い理想の世界などについては何一つ知らずともしないこの時代のクレドなのだ。

(ハインリヒ・マイヤー=オックスナー宛書簡。1869年5月25日 GW X 427.)

しかしトンネルを掘るにせよ、鉄道を伸ばすにせよ、人々がもっとも関心を持っているのは金融である。「公信用が資本のクレドになる」(MEW 23, 782)。バーゼルの金融資本はすでに18世紀末からヨーロッパの大半において「金臺 Geldgeber」の異名を取っていた。19世紀の前半にはバーゼルの大ブルジョワはスイス及び上部ドイツの各種企業の資金源の名を欲しいままにしていた。バーゼル資本はフランスの技術革新に投下されている。例えばフォルカール・ヴァイス会社はアルザス・ロレーヌにバーゼル資本の関与する工場をいくつも持ち、ニュー・オリンズとシドニーに関連企業を有し、エーインガー・アンド・キー銀行はスイスとヨーロッパの貸付に加わるだけではなく、1826年には南米コロンビアに投資している。この銀行はスイス、南ドイツ、アルザス、マルセイユ、トゥーリン、マインツ、ウィーン、リヴァプールの企業の投資家として活動している。この銀行はまた時代の花形産業たる鉄道敷設にも深く関与し、1837年にはロシアで鉄道敷設の融資に働き、38年にはスイスにおいてチューリッヒとバーゼルとの間に鉄道を敷くべく努力をしている。パッハオーフェンの直面するスイス資本主義商品交換社会もまた冥界の相貌を深めていたのである。バーゼルの大財閥の御曹司として生まれたパッハオーフェンは現実も透徹した目で眺めている。

「ほかの魂は飛び交う亡霊です」(『オデュッセイア』XI, 605, 引用者)。わがまともなバーゼル人はやがてみな絶対の安らぎを愛することになるでしょう。わずかな才気は金融銀行と、進歩と呼ばれるがらくたに向かっています。

(ハインリヒ・マイヤー=オックスナー宛書簡。1869年5月25日) GW X 427.

1850年代、バーゼルの有力名門家族は寄り集まって巨大なシンジケートを結成した。フランス、ドイツ、オーストリアなどへの投資を可能にする一方、スイス国内の鉄道敷設とゴットハルト・トンネルの掘削に巨額の投資を可能にするためである。それだけではない。ヨーロッパ随一の金融資本都市バーゼルは南北アメリカ大陸そしてインド、中国へと、海外への資金投資を実行し始めるのである。ヨーロッパ屈指の金融都市バーゼルにおいても、時代は海洋の時代に、レビヤタンの時代に入ろうとしているのである。

世界市場と海洋交易の時代にあつて法と正義の根拠としての母権のディスクールが資本のディスクールと交錯し、文字通り近代の政治的ディスクールを構成する。マルクスとパッハオーフェンという一対の思想家に共通するオルフェウス・モチーフを認めたいま、「法と正義」の問題はオルフェ

ウス神話に沿ったある固有名が授けられよう。オルフェウスが冥界に降りるのは愛する妻エウリュディケーに再会するためであった。エウリュディケー。広大な・正義である。無論、マルクスもましてやバッハオーフェンも、エウリュディケーという比較的新しい神話素をうかつに信じるにはその神話的教養は余りに正統的である。二人が提起する正義の女神は別の母神、ネメシス、である。

『資本論』の序文はある奇妙なイメージを提起していた。政治経済の領域には不気味な「復讐の女神たち」が潜んでいる。一方、『母権論』の最も有名な箇所は「アテネの章」のいわゆるオレスティア三部作解釈であるが、バッハオーフェンはこの「復讐の女神たち」の背後で正義を司る女神、原母ネメシスを読者の前に開陳する。

正義を司る女神の主権を主張する『母権論』のバッハオーフェンに対して、マルクスもまた正義の女神ネメシスを追尋していることなどありえるだろうか。オルフェウスの言語行為者としてのマルクスは同時に徹底した転覆的交差技法の遂行者でもある。マルクスはヘーゲル及びヘーゲル垂流哲学との対峙の書——「批判的批判の批判」——『聖家族』を「歴史のネメシス」（『経哲草稿』MEW 40, 470）に委ねている。

同じドイツ・ロマン主義的精神風土から出発した誕生と死をほぼ同じくしつつ、気質から見ればまったく対照的な、バッハオーフェンとマルクスの辿る道程は鮮やかな対称を描き出すだろう。歴史法学派の批判から始まるマルクスはしかしその根本的な神話学的関心からフェティシズム論に向かい、資本主義商品交換社会の価値形態を論じるだろう。シュレーゲル、バンジャマン・コンスタン、シャルル・ド・ブロスがその道程の標識である。一方、歴史法学派への帰属を意識するバッハオーフェンはベークの古代解釈学、クロイツァーの象徴・神話解釈学に沈潜し、かつそれを乗り越えることで古代母権社会の価値感情の分析に最初の鋸を入れるだろう。資本主義の冥界の天空に対称的な軌道を描く二人はほとんど双子のようにも見える。ギリシア神話の双子座は、バッハオーフェンによれば、ネメシスの子である（『母権論』GW III 231）。

われわれは小論の冒頭でカール・シュミットの『大地のノモス』を話題にしたが、ノモスもネメシスも共にギリシア語の動詞 *véμειν*（分配する）に派生した語である（GW III 234）。「大地の法ノモス」と「大地的原母ネメシス」に跨る *véμειν* の語義を探ることを始めたのが他ならぬカール・シュミットであった。⁵²

6 レビヤタン

1859年、マルクスは『経済学批判』はあの「巨大な(怪物的)商品集合」というあの名言で始まる商品分析のディスクールを確立する。そしてバッハオーフェンが、既述した理由で出版の遅れた『母権論』に先だって、しかしそれだけにバッハオーフェンの母権思想をよりコンパクトかつ明快

52 Carl Schmitt: NOMOS-NAHME-NAME. In: Der beständige Aufbruch. Festschrift für Erich Przywara. Nürnberg 1959. S. 92-106. この重要な論攷の存在を筆者に指摘してくれた磯忍君に感謝する。なお、Parerga: (München 1991)においてカール・シュミットの *véμειν* を論じた Thomas Schestag は近刊予定(2004年)の Paraterminalia において *véμειν* をバッハオーフェンの『古代人の墓象徴に関する試論』との関わりで論じている。

に読める『古代人の墓象徴に関する試論』を上梓した。相互に全く異質な世界と価値体系を提起することになる資本と母権のディスクールが誕生を告げたこの同じ年、二人の母校ではベルリン大学設立準備開始 50 周年の記念式典が行われている。祝辞を述べる学長はこの大学が誇る文献学者ベークである。新フマニスムスの伝統がこの大学に生き続けていると考えるべきではない。ベルリン大学の古典主義は、イエナの初期ロマン主義とフンボルトの新フマニスムスの理想をその背後に押し隠しながら、新興プロイセンが強いのは軍事ばかりではないことを強調するための体の良い文化的粉飾と化しているのである。この同じ年、在露プロイセン公使としてはじめて歴史の表舞台に登場する若き外交官がオットー・ビスマルクである。

「安政の開国」で世界を一つにした日本の明治政府は 1871 年、岩倉具視を全権大使として米欧に使節団を派遣した。見て回るヨーロッパ諸国のうち、工業化が比較的遅れた国であるが故に、そしてとりわけその皇帝制度故に、その後の日本はドイツに範を取り、足早なキャッチアップの歩を進めた。ベルリン大学が日本の教育立国に大いに参照されたことも周知のことである。しかしそれはもはや「文学による総合」の理念に支えられたベルリン大学とは言い難い。ギリシア・ローマ・ドイツ・プロイセン的ヨーロッパ中心主義の「世界史」がランケの弟子のルートヴィヒ・リース (Ludwig Riess 1861–1928) の東京帝国大学講師着任 (1887 年) と共に「来日」し、日本の西洋史研究が始まった。ベークの文献学もまた旺盛に摂取された。しかしそれはあの「かつて認識されたものの再認識」という新フマニスムスの古典解釈学の理想というよりはむしろ、確かに一面でベークの解釈学の特色でもあった「民族精神 Volksgeist」を解釈過程の最終インスタンスとするナショナリズム解釈学として、「日本文献学」の創設に活用されたのである。⁵³

しかし筆者は日本のドイツ・ヨーロッパ研究の出発点を回顧したいのではない。問題は球体としてのこの「茫漠とした無定形の固まり rudis indigestaque moles」(オウィディウス『転身譜』I, 7; MEW 25, 823) の経過する転身譜である。日本の開国が当座、「公定ナショナリズム」(ベネデヴィクト・アンダーソン) の鞏固化に直結するとしても、われわれの問題設定から見ればナショナリズムの後にやってくるものこそが問題となる。すでに『共産党宣言』は述べていた。

ブルジョワジーは世界市場の搾取によってすべての国々の生産と消費をコスモポリタンのに形作った。ブルジョワジーは反動主義者がひどく嘆いているように、産業のナショナルな土壌をその足下から引き抜いた。太古以来のナショナルな産業は絶滅させられ、いまなお日々絶滅されている。…[中略]…ローカルでナショナルな自給自足と鎖国に代わって諸国民相互の全面的な交通と全面的な依存関係が立ち現れる。…[中略]…個々の民族の精神的産物は世界の共有財となる。民族的偏見と狭量は次第に不可能なものとなり、多くの民族文学や地方文学から一つの世界文学が形成される。

53 1899 年渡独し、帰国後、東京帝国大学国語国文学教授として、日本の国文学の伝統をドイツ文献学の方法によって刷新した芳賀矢一が代表的な存在であろう。なお村岡典嗣『本居宣長』(岩波書店 1928 年)ではベークの文献学と宣長の国学との詳細な比較検討が行なわれている。342–380 頁。(藤原克己助教授の御教示に感謝する。)なお、ベークとパツハオーフェンの解釈学の比較的考察は注 30 に挙げた拙論を参照されたい。

ブルジョワジーはすべての生産手段の急速な改良と無限に簡便化されるコミュニケーションによってこの上なく未開の国民をもふくめてすべての民族を文明に引き込む。…[中略]… 彼らの安価な商品が万里の長城をも灰塵に帰させ、いかに頑固な排外熱にも降伏を余儀なくさせる重火気砲である。すべての民族は、もし滅亡を望まないのであれば、ブルジョワジーの生産様式を習得しなければならない。すなわちブルジョワジーにならなければならない。一言で言えば、彼らは世界をみずからの姿に似せて創るのである。（『共産党宣言』MEW 4, 466）

「みずからの姿に似せて世界を創る」創世記の神として登場するのは「ブルジョワ階級」なのであろうか。『資本論』の叙述の水準に照らせば、「資本の創世記」の主神はむしろ、世界の国民を「文明」に引き込む「異国の神」（MEW 23, 782）としての植民制度を内蔵した資本である。資本の文明化作用がその技術的先端に何を生み出すにせよ、文明化とはなによりもまず海洋化である。「文明」とはその限りにおいて大地を耕し、大地の報酬と「大地のノモス」を基盤とする文化 Kultur の対極概念である。明治維新の前年に出版された『資本論』の中でマルクスは日本に触れている。

ヨーロッパによって強制された外国貿易が日本で現物地代から貨幣地代への転化を伴うならば、日本の模範的な農業もそれでおしまいである。この農業の窮屈な経済的存立条件は解消するであろう。（MEW 23, 155）

日本もまたグローバル化競争に参入する。岩倉使節団は米欧の経済力の基盤が石炭と鉄鋼にあるのを見て取り、日本もまた駅とレールを基礎とする文明開化と富国強兵の道に入るだろう。岩倉使節団は日本と欧米の文明の差を 40 年と見た。⁵⁴ この数値は、ヨーロッパの大工業の歴史に照らせば穏当な数字と言える。西欧の工業化という点で見れば、たしかにそれは 1830 年代にその顕著なあらわれを示し始めたばかりだからである。以来、日本はこの 40 年の時間差を解消し、グローバルなリアルタイムの同時性を獲得するための努力の連続であった。マルクスやパッサオーフェンに対する日本側の関心が、その深奥において反欧米思想、反近代思想、近代の超克思想と結びついていたことは比較的容易に理解しうることであろう。しかし管見では、技術格差の 40 年のギャップを埋めるは比較的短時間で為し得たとしても、資本主義批判の歴史的・太古的質料に掘削の鋸を入れることはそう簡単ではない。この間、脱亜入欧と西欧技術獲得の努力は、マルクスの叙述に照らして言えば、キュクロプス的「吸血施設 Blutaussaugungsanstalten」（MEW 23, 493）を国土に張り巡らすことであり、人間と大地を「八つ裂きにされた詩人(オルフェウス)の四肢 disjecta membra poetae」（MEW 23, 385）として細分化し、「自然の贈与」を蕩尽し、大地という大地からあらゆる心情的備蓄、「諸国民の生命力の更新のための備蓄」（MEW 25, 821）を奪うことで決着を見そうな勢いである。マルクスが提示した資本の変幻もますます本領を發揮しているように見える。グローバル化を標榜し、世界市場を制圧する資本は、かつて例えばかつてレーニンが「帝国

54 久米邦武編『米欧回覧実記』岩波文庫(二) 66 頁。なお(四) 409 頁には「世界ノ文明、相関クルノ深淺ヲ論スルハ、約五十年乃至百年ノ事ニスギス」とある。

主義」と呼んでいたものがまだほんの牧歌的なよちよち歩きの怪物に過ぎなかったかのように思わせる跳梁振りを発揮している。この、あたかも「地球の私有」と「独占された地球」(MEW 25, 824)に行き着きかねないグローバル資本主義は、『資本論』で描かれた「資本の魂の輪廻転生」のメタモルフォーゼを終え、ほぼ完全変態を遂げて、地球という海洋から成る球体を支配するに至った巨大海獣レビヤタンである。

戦うなどとは二度と言わぬがよい。(ヨブ記 40, 32)

自己の創り出したレビヤタンを見せつける荒ぶる神の圧倒的な力の前にユダヤの義人ヨブはひれ伏す。しかし、言われるがままに即座に塵と灰の上にひれ伏し、悔改めるヨブの改心は「読む者に不可解な印象を残す」⁵⁵。この疑問は確かに、十字架のイエスの言葉「神よ、神よ、何故われを見捨てたまうのか」にそれが「神よ、神よ、何故われを見捨てたまうのか」というヨブの問いかけに対する神の「ヨブへの応答」(カール・グスタフ・ユング)を見、そこにオリエントからオクシデント、ないしは西洋キリスト教への壮大な橋渡しを見定める問いの出発点でもあるのであろう。バツハオーフェンとユングの間には母権思想の受容史が伸びているのは事実であるにしても、その方向を辿るのが筆者の目論見なのではない。筆者に関心があるのは、レビヤタンと戦う思想と言葉の生き残え方である。マルクスが『資本論』で「我が友」(MEW 23, 637)と呼ぶハインリヒ・ハイネはその『ロマンツェロ』の最後の詩「宗教論争 Disputazion」で人類復活の暁に食卓に供せられるレビヤタンの魚料理を語っている。

レビヤタンの長さは
百哩、ひれ足の羽をもち
バサンのオクのように大きく
その尾はスギのよう。
しかしその肉は美味で
亀よりもおいしい
復活の日には
主は食前の祈りを捧げ
敬虔なる選ばれし人々
義なる人々、賢き人々
我らが神の大好きな魚を
みんなして食べ尽くすのだ。⁵⁶

55 山影隆「ブレイク『ヨブ記挿絵集』——個の変容——」『幻視の地へ。ヨーロッパ文学におけるヴィジョンの諸相』山影隆論文集編集委員会編。松柏社 2002年 110頁。

56 Heinrich Heine: Disputazion. In: Historische Gesamtausgabe der Werke. Bd 3/1. Bearbeitet von Franke Barfeit, Alberto Destro. Hamburg 1992. S. 168.

海獣レビヤタンはオリエント神話世界の産物であり、レビヤタンと戦う神の登場する最古の神話はバアルを主神とするウガリット神話である。⁵⁷ バビロンの主神マルドゥクもまた海獣 / 竜ティアマクと戦う。ヨブ記にバビロンの神話の影響が感じられるのはユダヤ人のバビロン幽囚の時代にペルシアの思想材がイスラエルの民に大量に流入したためである。旧約エステル記に登場するモルデカイという家系がある。エステル記はヘブライの、しかしペルシアに由来の祝日フルールの制定を語る縁起譚であるが、エステルという名はバビロンの大地母神イシュタルに由来すると考えられる。エステルの父親代わりの後見人がモルデカイである。由緒正しいユダヤ人の名とされるが、元来はやはりペルシア語で、モルデカイという名は「紀元前 5 世紀のペルシア・バビロン混合文化で愛好された名前で、その背後に太陽神マルドゥクが隠れている」⁵⁸ という。その後、モルデカイの末裔が世界に離散したのであろう。ヨーロッパの古来の中心とも言えるトリーアにも、ボヘミア地方からモルドシャイ Mordochai というラビの家系が移り住んだのが 18 世紀中頃。代々、ラビ職を継ぐのは長男で、19 世紀初頭、長男ではないために弁護士となったヘンシェル・モルドシャイは当時のユダヤ人のドイツ人同化の趨勢に応じて、プロテスタント・キリスト教に改宗した。1817 年頃と推定される。⁵⁹ その後、1824 年、当時 6 歳だった息子のシャルル・モルドシャイ Charles Mordochai もプロテスタントの洗礼を受け、⁶⁰ ドイツ語の固有名を与えられることになる。Karl Marx. 古代バビロンの巨大海獣 / 竜(ティアマク。ウガリット神話のレビヤタン)と戦うマルドゥクをその内部記憶装置に登録し、かつ merx (商品)に限りなく接近した名である。旧約聖書続編エステル記にはモルデカイの見た夢が記されている。

見よ、叫びと騒ぎ、雷と地震、そして混乱が地上に起こった。見よ、二頭の大きな竜が現れて互いに戦いを挑み、大きな叫び声をあげた。その声を聞いてすべての国民は戦いの準備をし、義の民と戦いを挑んだ。見よ、闇と暗黒の日、苦しみと憂い、虐げと大いなる混乱が地上に起こった。すべての義の民はうろたえ、ふりかかる災いを恐れ、滅ぼされることを覚悟して、神に助けを求めた。その叫びは、小さい泉が、やがて水を豊かにたたえる大河となるように、大きくなった。すると光が現れ、太陽が昇り、卑しめられている人は高められて、高貴な者を食い尽くした。

モルデカイの夢『旧約聖書続編エステル記(ギリシア語)』A, 4-10⁶¹

57 Otto Kaiser: Die mythische Bedeutung des Meeres in Ägypten, Ugarit und Israel. Berlin 1962. S. 74f. Oswald Loretz: Ugarit und die Bibel. Kanaanäische Götter und Religion im Alten Testament. Darmstadt 1990. S. 92-93.

58 Wolfgang Philipp: Die Absolutheit des Christentums und die Summe der Anthropologie. Heidelberg 1959. S. 111.

59 的場昭弘『トリーアの社会史。カール・マルクスとその背景』未来社 1986 年、228 頁。

60 Arnold Künzli, a.o.O., S. 33.

61 『聖書 旧約聖書続編つき』(続) 52 頁。

本稿に続く諸篇は本紀要および『言語態』(東京大学・駒場)に順次掲載する。

Kapital und Mutterrecht I Leviathan und Nemesis

Ryuichiro Usui

Die Öffnung Japans der Ansei-Ära hat die Welt vereinheitlicht, sagt man hier zu Lande. Trotz ihres japano-ethnozentrischen Beigeschmacks ist diese Feststellung zutreffend. Aber nicht nur im geopolitischen Sinne. Im Jahre 1859, als die Wellen kapitalistischer Globalisierung unsere fernöstlichen Küsten erreichten, hat sich nicht nur das bis dahin von der Außenwelt abgeschlossene Japan geöffnet, zur selben Zeit erschienen auch zwei folgenreiche kapitalismuskritische Diskurse: 1859 veröffentlichte Marx in London seine „Kritik der Politischen Ökonomie“, und ebenfalls 1859 hat Bachofen in Basel sein mutterrechtliches Erstlingswerk, „Der Versuch über die Gräbersymbolik der Alten“, publiziert.

Die Iwakura-Mission, die die Meiji-Regierung 1871 nach Nord-Amerika und Europa geschickt hat, konzentrierte sich vor allem auf das, was Japan am nötigsten brauchte: Kohle und Stahl, Eisenbahnen und Teilnahme am Welthandel. Das Zivilisationsgefälle zwischen Europa und Japan betrug nach Einschätzung dieser Mission 40 Jahre. Ob Japan 130 Jahren später dieses 40 Jahr-Gefälle up-ge-catched hat oder nicht, darum geht es im Folgenden nicht, eher soll der plausiblen Vermutung Rechnung getragen werden, dass Japan zweifelsohne das Europa, das vor 130 Jahren sowohl Marx auch Bachofen als ‚Hölle‘ heftig kritisiert haben, in Echtzeit — in real time — realisiert hat.

Unter diesen Vorzeichen zielt die Analyse der „Sprachgebärde (Gengotai)“ des „Kapitals“ darauf, ein eigentümliches ästhetisches Charakteristikum dieses „Kunstwerks“ (Marx) dingfest zu machen. Das „Kapital“ schildert die „Seelenwanderung“ der „Kapitalseele“ in der Hölle der verkehrten Welt des Kapitalismus. Dieser Text ist nicht nur dantesk wegen seiner Höllenfahrt, sondern auch orphisch wegen der „disjecta membra poetae“, d.h. der zerrissenen und zerstreuten Glieder der Arbeitsteilung Unterworfenen in den modernen Industriestaaten.

Für den Basler Bachofen ist der moderne Finanzkapitalismus ohnehin die Hölle, ein Schattenreich, in dem die Menschen kein höheres Credo als Eisenbahn und Tunnel kennen. Deshalb hat er sich lebenslang mit einer Gegenwelt beschäftigt, mit der Welt des Mutterrechts, die der kapitalistischen diametral entgegengesetzt ist.

Der Verfasser versucht nun, bei den beiden auf den ersten Blick so verschiedenen Theoretikern oder, wenn man so will, Diskurstiftern einen gemeinsamen Nenner ausfindig zu machen, indem beide zunächst in einen „geistesgeschichtlichen“ Kontext gebracht werden. Auffällig ist die Tatsache, dass Marx, der aus dem westlichen Teil Deutschlands stammt, und Bachofen, der aus der Schweiz kommt, zur selben Zeit ungefähr um 1836 am selben Ort, nämlich in Berlin, studiert und bei denselben

Professoren Vorlesungen gehört haben. Vor diesem Hintergrund wird die These vertreten, dass sich ein theoretischer Kern dieser beiden Kapitalismuskritiker in einem gemeinsamen, auf die Antike bezogenen Gedankenpotential ausmachen lässt, das über die deutsche romantische Mythenforschung, aber auch über den Neuhumanismus und die Historische Rechtsschule vermittelt wurde.

Im vorliegenden Beitrag, der nur das erste Kapitel einer umfassenderen Auseinandersetzung mit dem genannten Themenkomplex darstellt, soll hauptsächlich der junge Marx behandelt werden, nicht der Junghegelianer Marx, sondern der 17-jährige Bonner Student, der bei August Wilhelm Schlegel und F. G. Welcker griechisch-römische Mythologie und die Liebeslegien des Propertius studiert und seine spätere Frau, Jenny von Westphalen, unermüdlich mit langen und wortreichen Liebesgedichten überhäuft. Die Dichtungen des jungen Marx sollten nicht umstandslos bagatellisiert werden, da man in ihnen doch klar genug eine mythisch-orphisch-gnostische Spur freilegen kann, die auch die Schriften des späteren Marx durchzieht.

Bachofen und Marx waren beide Studenten, die sich dem Neuhumanistischen Ideal der Berliner Universität, nämlich der „Universitati Litterariae“, d.h. der „Gesamtheit bzw. Einheit der Wissenschaften bzw. der Literatur“, anvertraut hatten, so dass beide aus ihrer Abneigung gegen die „Fakultäts-Wissenschaft“ keinen Hehl machten. MATERialismus und MUTTERrecht sind zwar nicht wesensgleich, aber beide haben eine ursprünglich kompensatorische Funktion, zumal im Zeitalter des Leviathan, d.h. des globalisierten Kapitalismus, eines durch verschiedene Metamorphosenetappen hindurch gegangenen Ungeheuers, das seine Existenz nicht nur dem Erdball, sondern wesentlich dem Wasser verdankt, dem Meer, als Gegenpol der Erde, dem Sitz der „Erdhaftigkeit des Rechts und der Gerechtigkeit“ (Carl Schmitt: Der Nomos der Erde). Bezüglich des gemeinsamen Gedankenguts von Marx und Bachofen ist darüber hinaus auf das in der biografischen Forschung zu Bachofen vernachlässigte Faktum hinzuweisen, dass Bachofen Welcker, bei dem der junge Marx so eifrig studiert hat, in einer für ihn entscheidenden Lebensphase große Verehrung gezollt hat, nicht zuletzt deswegen, weil Welcker als erster das Wort „Mutterrecht“ benutzte. Ein weiteres Indiz für die Komplizenschaft von Marx und Bachofen lässt sich daran ablesen, dass Nemesis, die orphische Allmutter der Natur bei Bachofen, chiastisch „umgestülpt“ bei Marx als „Historische Nemesis“ auftaucht.